ロシアのテレビシリーズ作品の黄金時代
― 娯楽と芸術、そして時間的限界のない映像物語 ―

守屋 愛

はじめに

娯楽は芸術として研究の対象になるのか。ロシアの国立芸術学大学 (Государственный Институт Искусствознания) のドゥコフ氏は、かつて、大学の舞台芸術大衆ジャンル科 (Отдел массовых жанров сценического искусства) が研究を始めた『娯楽と芸術』というテーマの選択に同僚が驚いたというエピソードを論文の中で披露している [1]。が、現在、この大学は公式ホームページ上で、「本学はロシア芸術学の最前線に位置する」と宣言しており [2]、学問として『メディアと大衆芸術の芸術的諸問題』を掲げ、同時に１）現代文化の最重要現象を学術的に研究するための基本的な基礎の確立を使命とした、『ロシアのテレビ史』、２）映画、アニメ、写真、ラジオ、テレビといった諸芸術の美学および創作の可能性の諸問題に関する研究シリーズ、３）シリーズ『現代文化におけるマスメディアとインターネット』等、以上の三点を方向性として述べている [3]。2006 年に大学の大衆ジャンル科が開催したコンファレンスでの発表は『娯楽と芸術』という論文集に収録され、そこでは多様な大衆芸術ジャンルにおける研究論文が紹介されている [4]。また引き続き、2008 年には全ロシアコンファレンスと銘打って開催された、同様の会議の研究結果を論文集『娯楽と芸術２』に収めている [5]。ロシアにおいても大衆的な諸ジャンルを芸術あるいは文化として広く研究対象とする時が到来していると言えるだろう。

こうした近年の学術的な流れを受けて、この論文は、現在のロシアでテレビシリーズが大量に制作され放送されている現状を大衆文化ととらえ、考察を試みるものである。着目すべき作品を紹介しつつ、社会の諸要素が過去にもたらした、または今後もたらすであろう影響を考えあわせながら、ソ連時代から現在までにテレビシリーズがたどった状況を時系列で特徴づける。それによって、現代ロシアにおいてここまで興隆した理由を検討し、その現状と今後の展望を論考するものである [6]。

芸術鑑賞と時間

1998 年の冬、サンクト・ペテルブルグのマリインスキー劇場に、前評判の高い歌劇『イーゴリ公』新バージョンの初演を観に行った。劇場はもちろん満員御礼であった。午後 7 時に開演。聞きなれた美しい旋律と圧倒的な歌唱力。演出は現代風に大胆にアレンジされていて、場面は色鮮やかであった。素晴らしい舞台だったが、段取りが慣れていないのか、舞台

装置が変わる暗転が毎回妙に長く、10 時になってもまだ物語は半分ほどしか進んでいない。11 時になっても、12 時になろうとしても終わる気配がない。休憩時間のたびに、帰宅の足を心配する観客があきらめて劇場をだんだんと去っていく。日付が変わって午前 1 時ごろにようやく終演したとき、鳴り止まぬ感激の拍手を送ったのは、腹をくくって最後まで観ると覚悟した半分にも満たない観客だった。もちろん、圧倒的な魅力の舞台だったが、この芸術の、終電の時間などといった俗世間の人々の都合など意にも介さず、芸術の完成度を優先してしまう意気込み、そしてそれが許されてしまう土壌、これこそがロシア文化だと痛感する。もちろん、ロシアではそれはオペラの世界だけの話ではない。

ロシア文学の代表作には長編作品が多い。トルストイ然り、ドストエフスキー然り。重厚壮大が愛されるお国柄である。アメリカが 1956 年にオードリー・ヘップバーンを主演にして『戦争と平和』（キング・ビダー監督 3 時間 28 分）を制作したとき、ソ連はこれに対抗し、国家を挙げて、自国の文豪トルストイの原作に忠実な『戦争と平和』を撮影することを決定した。1965 年の制作で、監督はセルゲイ・ボンダルチューク。ボンダルチューク家は現在でもロシア映画界の名門である。その始祖ともいえる彼は、ソ連版の『戦争と平和』を 6 時間半を上回る大作に作り上げた。ちなみに筆者は高校生のときにこの映画を、かつて巣鴨にあった『三百人劇場』という小映画館で鑑賞した。三百人劇場というのだから 300 席はあったのだろうが、館内は満員で、やむをえず通路の階段に体育座りに座って 6 時間半超を見通した。ソ連的な思考に慣れていない高校生には難解だった上、身体的にもきつかったが、その思い出は強烈に残った。アンドレイ公爵がアウステルリッツで撃たれ、青い空を眺め人生のむなしさを悟るシーン。青々と生い茂る樫の木を見つめ、力強い生命力を感じるシーン。ソ連版の『戦争と平和』は小説の原文をたどるように、忠実にトルストイの描いた世界を再現している。そのために必要な時間は必要なのである。時間の枠は二の次となる。

その数年後、都内のある映画館でソ連映画『静かなるドン (Тихий Дон)』(1958 年セルゲイ・ゲラーシモフ監督) が上映された。上映時間はこれも 6 時間弱である。映像も美しく、物語はドラマチックで、惜しみない称賛に値する作品だが、観客に強いる体力の消耗は半端ではない。観客にとって快適な上映時間の長さなど気にもせず、とにかく原作への忠実さと芸術性を追い求めるソ連映画界の姿勢には敬服せざるをえない。

とはいえ、こんなにも上映時間の長さと観客への配慮を考慮しない映画館鑑賞用映画は、さすがのロシアでも、古きよき時代の遺物といえるだろう。現在、ロシアのオペラ界が終演時間に配慮を示しているかどうかは不明だが、少なくとも映画の世界では、長い映像作品は映画館からテレビへと移っていった。テレビの 連続ドラマという形になって、今ではいくらでも長い作品を提供している。

「テレビドラマ (теледрама)」ではなく「テレビ映画 (телефильм)」

ロシア映画界の巨匠エリダール・リャザーノフ監督が昨年 (2015 年) の 11 月末に亡くなり、彼を追悼する番組や彼の作品がテレビで連日放送された。日本で最も有名な彼の作品

はおそらく『運命の皮肉、あるいはいい湯を (Ирония судьбы, или С лёгким паром!)』であろう。これは日本では映画として多くの人に認知されているかもしれないが、実際は 1975 年の大晦日に公開されたテレビドラマである。が、当時、この作品はその後に映画館でも上映されているので、劇場映画にもなっている。これは最初がテレビ放送でその後に劇場公開という珍しいケースだが、家庭に録画機器のない時代、人々の再度観たいという要望に応えたものだろう。その逆のパターン、劇場映画がその後テレビ放送されることは定番である。今、「テレビドラマ」、「劇場映画」と言葉を分けたが、そもそも、現在、劇場映画とテレビドラマとの境界は、とりわけロシアでは曖昧になってきている。劇場映画は «кинофильм» というが、日本でテレビドラマと呼ばれているものは、直訳の «теледрама» といわれるより、むしろ «телефильм» と呼ばれることの方が多く、訳せば「テレビ映画」となる。劇場映画もテレビ映画も同じ映画産業の産物という認識である。たとえば、ロシア国立映画芸術科学アカデミー主催のゴールデン・イーグル賞のジャンルを例に挙げると、「劇映画 (игровой фильм)」、「テレビ映画 (телефильм) または、全 10 話以下の小シリーズ (мини-сериал)」、「テレビシリーズ (телевидионный сериал)」「ドキュメンタリー映画 (неигровой фильм)」「アニメ―ション映画 (анимационный фильм)」というカテゴリー分けになっている [7]。テレビ映画の中でも、とりわけこの「テレビシリーズ」は、日本でいう連続ドラマのことだが、一般に「シリーズ (сериал)」と呼ばれて、現在のロシアで絶大な人気を博し、大量に制作されている。日本の漫画・アニメのように、いまや、この「シリーズ」が、娯楽でもあり芸術でもある大衆文化として非常に大きな存在を示しているのである。

この状況を反映して、同じ作品で劇場映画版とテレビ映画版を両方制作する場合もある。有名な作品では『提督 (Адмиралъ)』(2008 年アンドレイ・クラヴチューク監督) が、まず劇場映画 (123 分) として公開され、その後全 10 話のシリーズ (467 分) として 1 チャンネルで放送された。映像作品として比べれば、劇場版はシリーズを時間的に短く編集しただけのものである。劇場映画は外国に輸出しやすい。アメリカを経由して日本でも DVD が販売されている [8]。しかし、劇場映画 123 分とシリーズ 467 分とでは、人物の細かい性格描写やその心理の変化の過程などをたどっていこうとするならば、その差はかなり大きい。鑑賞後の登場人物への思い入れは、後者が圧倒的に強く残る。連続ドラマを海外向けに短く編集し直している作品は、他に『シークレット・エージェントの手記 1 (Записки экспедитора Тайной канцелярии1)』(2010 年オレグ・リャスコフ監督) が挙げられる。シリーズ全 8 話 338 分に対して、劇場用は 135 分に縮小され、アメリカやドイツに輸出された [9]。ロシア映画の長さは、詳細な課程をじっくり表現したいロシア性といえるが、外国にしてみると、その長さが漫然さに感じられ、切り捨ての対象になってしまうのであろう。しかし、物語の経過を詳細に描出するところが、シリーズの何よりの強みであり、もともと演劇が好きで重厚壮大が好きというロシア人の好みに合致し、その社会でシリーズが急速に発展していった理由と考えられる。

愛される国民的シリーズ

現在、映像作品の鑑賞は映画館やテレビに留らない。むしろ、インターネット上での有料・無料の視聴の方が多いかもしれない。だから、劇場映画とテレビ映画などというカテゴリー分けはだんだん消滅していくのではないだろうか。最終的には統合されて、その中で時間的に短い芸術的映画と長いシリーズに分けられ、さらに下位のコメディー、メロドラマ、推理作品、ハードボイルド等々といったジャンルによる分類が残ることになるだろう。実際、ソ連期とロシア期のありとあらゆる映像を大量に配信している大手インターネットテレビは、サイト上の無尽蔵の映像作品をそのように分類している[10]。

今では当たり前のようにあるシリーズだが、そもそも、テレビは既成の映画を放映するだけだった。ソ連では 1960 年代になって、テレビ局の注文によって映画を制作する、いわゆるテレビ映画が登場し始めた。最初は映画をテレビ放映の枠にあわせた形で制作するものだったが、だんだんと長編のドラマも制作されていくようになった。

そして、ソ連時代の伝説的なシリーズが現れた。それが放送されるときは街から人影が消えたとさえいわれる[11]。ユリアン・セミョーノフの小説を原作とする『春の十七の瞬間 (Семнадцать мгновений весны)』(タチヤーナ・リオーズノワ監督 全 12 話 827 分) だ。1973 年 8 月に初放映された。1945 年のベルリンでソビエトの諜報員スティルリッツ（本名はマクシム・イサーエフ）は、祖国のため、ナチス親衛隊連隊指揮官として敵陣ドイツ第三帝国に潜入している。祖国のために自己のすべてを犠牲にする、悲しいほどストイックなロシア人スパイの物語だ。この映画は今なお非常に人気が高い[12]。大祖国戦争である第二次世界大戦中のスパイを描いたこの作品は、昨年も戦勝記念日の特別番組として国営テレビ局 РОССИЯ 1 で一挙放送された。

『春の十七の瞬間』にまつわるエピソードは数多い。コメディー映画の巨匠レオニード・ガイダイ監督の最後の映画作品は『デリバソフスカヤ通りは晴れ、ブライトンビーチはまた雨 (На Дерибасовской хорошая погода, или На Брайтон-Бич опять идут дожди)』(1992 年) である。これはスティルリッツとは正反対の間抜けなソ連スパイの物語であるが、映画中に、真のスパイのテーマソングとして何度も『春の十七の瞬間』のオープニング曲が挿入されており、その両者のギャップが観る者を大いに笑わせる。

伝説のシリーズ『春の十七の瞬間』にはもう一つ驚かされたことがあった。昨年カザン市で行われた世界水泳選手権では、男女ペアのシンクロが競技として初めて採用されたことが話題になったが、なんとロシア人ペアの演技はこの『春の十七の瞬間』がテーマだった[13]。男性はスティルリッツの軍服風の水着を身にまとい、曲はこの映画の悲しい場面に使われるサウンドトラックで、ドラマの中で聞いた爆音まで時々響かせていた。ほとんどの外国人には全くわからなかっただろうが、ロシア人ならば誰もがわかったテーマである。第二次世界大戦終結 70 周年の記念の意味もあったかもしれないが、42 年前のドラマのテーマで初種目の演技を飾る、やはり『春の十七の瞬間』はロシア人のソウルドラマといえるのではないだろうか。

それから、時が経ち、ソビエトが崩壊して経済も社会も混乱を極めていた 90 年代、人気を博していた二人の名優、故イリヤ・オレイニコフとユーリー・ストヤノフがアネクドート形式で繰り広げるコメディー番組『ゴロドク (Городок)』の中に、当時のテレビドラマ事情を象徴するアネクドートがある [14]：

ОВИР（外国人ビザ登録部）職員らしき男性と、アメリカへ出国しようという年配婦人の会話

- Замужем?
- А?.. Нет... нет...
- Дети есть?
- Что?.. А, нет, нету...
- Значит, все-таки решили уехать из страны?
- Да, уехать...
- Ну а куда?
- В Санта-Барбару.
- А почему именно в Санта-Барбару?
- Ну... я ведь там всех знаю...

「既婚ですか?」
「え?…いいえ…いいえ。」
「お子さんは?」
「なに?…いいえ、いません。」
「で、やはり、国を出ることに決めたのですか。」
「ええ、出て行くことに…。」
「それでどちらへ。」
「サンタ・バーバラへ。」
「どうして、またサンタ・バーバラなんです?」
「だって…、私、あそこのみんなを知っているんですもの。」

ロシア経済が混迷を極めた 1990 年代、テレビでは昔の作品が再放送されるほか、アメリカ制作の全 2137 話という怪物メロドラマ『サンタ・バーバラ』(1992 年から 2002 年まで放送) やメキシコ制作の『野生のローザ』(1994 年から 1995 年まで放送) といった、いわゆるソープオペラと呼ばれる、安っぽい外国テレビ小説がずっと放送されていた。ソ連が崩壊して、文学分野では今まで禁止されていた作品がどっと入ってきた時代でもあったが、映画産業界についていえば、極端な資金不足で、国産の映画を制作することも困難、外国の良質な作品を購入することも困難といったところだった。ただ、そのような状況にも関わらず、1995 年に、アメリカでのエミー賞にあたる、ロシアテレビ産業界でのその年の功績を称えるテフィー賞が創設されていることは着目に値する [15]。

2000 年代国産シリーズ時代の到来

その後、経済が回復するにつれ、ロシア製のシリーズもずいぶんと豪華な作品がテレビをにぎわすようになっていった。もともと演劇界の層が大変厚い国である。俳優も監督も脚本家もその他のスタッフも、テレビ映画界で活躍できる人材も無尽蔵にいる。

レベルの高いシリーズが制作されていると気づき始めたのは、ボリス・アクーニンのファンドーリンシリーズの小説から、『アザゼリ (Азазель)』(2002 年 アレクサンドル・アバダシヤン監督 全 4 話 204 分)、『トルコの捨て駒 (Турецкий гамбит)』(2005 年ジャニク・ファイジエフ監督 全 4 話 203 分／劇場映画版 132 分もあり)、『五等官 (Статский советник)』(2005 年 フィリップ・ヤンコフスキー監督 全 4 話 191 分／映画版 125 分) の映像化としてのシリーズが出てきた頃である。三作品ともアクーニン自身が脚本を書いており [16]、『アザゼリ』では 2002 年テフィー賞の最優秀脚本賞を受けている [17]。この 2002 年には、テフィー賞とは別に、ロシア映画産業界の功績を称える前述のゴールデン・イーグル賞が創設されている。『五等官』には映画界の重鎮ニキータ・ミハルコフが俳優として出演しており、彼は今作品で 2005 年にこのゴールデン・イーグルの最優秀主演男優賞を、有名俳優コンスタンチン・ハベンスキーも同作で同様に最優秀助演男優賞を獲得している。この点でも、シリーズと映画の区別はない。この三作品はいずれもテレビ放映されたシリーズである。

予算をかけたシリーズがどっと制作され始める時代がきた。というのも、ロシア経済は急成長を遂げていたからだ。国の経済事情との関係は、舞台よりも映画、ことにテレビ映画にはてきめんに反映される。1990 年代の混沌から抜け出し、ロシア全体が右肩あがりの成長を続けていた頃、それを反映するかのように、長編の大作シリーズが次々に制作された。この時期の大型シリーズの内容は、どちらかと言えば、文学作品を題材にしたものが多かった。たとえば、ドストエフスキー作『白痴 (Идиот)』(2003 年ウラジーミル・ボルトコ監督 全 10 話 510 分)、イリフ・ペトロフ作『黄金の仔牛 (Золотой телёнок)』(2005 年ウリヤーナ・シルキナ監督 全 8 話 365 分)、パステルナーク作『ドクトル・ジバゴ (Доктор Живого)』(2006 年アレクサンドル・プロシキン監督 全 12 話 484 分)、レールモントフ作『現代の英雄 (Герой нашего времени)』(2006 年アレクサンドル・コット監督 全 6 話 312 分)、ドストエフスキー作『悪霊 (Бесы)』(2006 年ゲンナージー・カリュク監督 全 6 話 299 分)、同じく『罪と罰 (Переступление и наказание)』(2007 年ドミトリー・スベトザーロフ監督 全 8 話 407 分)、同じく『カラマーゾフの兄弟 (Братья Карамазовы)』(2009 年ユーリー・マロース監督 全 12 話 518 分) など続々と、長時間仕上げが可能というシリーズの長所を生かして、原作により忠実で、登場人物たちの成長や心の変化を視聴者がじっくり味わうことのできる映像作品を作り出していった。

この時期の、文学作品を映像化したシリーズの金字塔ともいえるのが、ブルガーコフ作『巨匠とマルガリータ (Мастер и Маргарита)』(2005 年ウラジーミル・ボルトコ監督 全 10 話 499 分) である。昨年の戦勝記念日の前後、平日は欠かさず放送されていた長編のシリーズ [18] が数日間放映休止になった。戦後 70 周年の節目はとても大切だから安っぽいシリーズを観て

いる場合ではなく、シリーズであっても記念碑的な作品を放送するべきであるかのようであった。であるから、その通俗なシリーズを休止して、国営放送局 РОССИЯ 1 は国を代表するようなシリーズを二編、一挙放送した。これこそ、特別な日に観るべき、ソ連ロシアテレビ映画史に輝く名作という認識であろう。一つは先ほど述べた『春の十七の瞬間』だったが、もう一つがこの『巨匠とマルガリータ』だった。

このブルガーコフの代表作の映像化はセンセーションを巻き起こしたという。噂では、2005 年の初回放送のとき第一話の視聴率は 50％だったとか、ロシア人の三人に一人はこの作品を見ているとか言われている。しかし、仮に本当ではないとしても、そのような噂ができるほどの作品なのである。実は、現在、放送局 РОССИЯ 1 はその公式サイト [19] で、放送済みの大部分の番組を、シリーズも含めて、無償で視聴できるようにしている（ただし、もう一つの有力放送局 1 チャンネルは最近、視聴を有料にするシステムに移行したので、РОССИЯ 1 も、いつまで無料視聴が可能かはわからない）。РОССИЯ 1 のサイトでは、視聴された回数によるシリーズの人気ランキングがわかる [20]。戦勝記念日前後の放映後、『巨匠とマルガリータ』の各話はこぞって上位に名を連ねた。このランキングはここ数年に始まったものなので、初回放送時の人気を差し引いて考えても、再放送に再度大きい反響があったことがわかる。

この『巨匠とマルガリータ』の制作は今からたった 10 年ほど前であるが、このシリーズもすでに伝説の域に入りつつある。それには、この作品に出演した役者たちがすでに十数人も死去しているという事実が影を落としている。若くてまだまだ活躍すると思われた役者たちが、不可解なほど次々と亡くなったのだ。それは事実である。完成度の高い作品は二次的な物語を生む。詮索好きの他局では、超能力者を語る人物を使って、小説『巨匠とマルガリータ』は悪魔の言葉をブルガーコフがディクテーションしたものだ、これは呪われた作品だ、などという特別番組まで放送している [21]。この小説の冒頭場面である、モスクワのパトリシアル池には、『知らない人と話すことを禁ずる (Запрещено разговаривать с незнакомцами)』という標識が立っている。それには、ヴォランドとコロヴィヨフと黒ネコのシルエットに赤い斜線が入っている。『巨匠とマルガリータ』は文学作品もシリーズもすでに国家的文化的財産になっているようである。

2000 年代のシリーズの中で、文学作品ではないが、詩人エセーニンの死の謎を取り上げた『エセーニン (Есенин)』(2005 年イーゴリ・ザイツェフ監督 全 11 話 572 分) も特筆に値する。主演のセルゲイ・ベズルーコフの父、ヴィタリー・ベズルーコフの同名小説をもとに作られた作品で、セルゲイ・エセーニンが田舎からサンクト・ペテルブルグへ出てきて詩人として活躍をし始めるところから、死に至るまでを描いている。エセーニンの詩の魅力を再認識させるとともに、自殺とされている彼の死を他殺へと大胆に書きかえて、エセーニンの死の謎を再び世間に投げかけた。ヴィタリー・ベズルーコフの本の冒頭には、ロシア大統領ウラジーミル・プーチンに向けた、エセーニンの死の謎の再捜査を求める嘆願書が掲載されている。嘆願の署名は、エセーニンの姪Ｃ．Π．エセーニナ、俳優セルゲイ・ベズルーコフ、歴史家Ａ．Ｃ．プロコペンコが名を連ねている [22]。その完成度の高さからか、シリーズ『エセーニン』は「芸術的テレビ映画 (Художественный телефильм)」と呼ばれることもあるほどだ。

2008 年に『提督 (Адмиралъ)』が劇場映画として公開され、その後全 10 話のシリーズがテレビ放送されたことは前述したとおりだが、日本版 DVD のパッケージには「総製作費 20 億円、構想 5 年、撮影期間 241 日、スタッフ計 1500 人」といかにスケールの大きい映画かが謳われている [23]。が、その直後、2008 年 9 月にリーマンブラザース社の破綻を引き金とした世界恐慌はロシアにも影響を及ぼし、2009 年に放送された新作のシリーズの数は激減したのだった [24]。

大量生産と外国版リメイクへ

しかし、シリーズの制作本数からロシア経済を観察するならば、この経済危機は短期間で終わったようだ。なぜなら、2009 年に制作本数が一時的に激減したものの、2010 年からは着実に本数が増加、いやそれどころか激増していったからだ。そのあたりの事情は、2012 年 12 月 24 日付のロシア NOW へのワジム・ネステロフ氏の寄稿記事に詳しい。それによれば、「長期連続ドラマのコマーシャルは、他の番組のコマーシャルよりも高額で、テレビ局の収入の 3 分の 1 ほどをドラマが稼いでいる。[……] 連続ドラマの放送が週 1 回の西側諸国の「垂直」システムとは違い、ロシアはドラマが終了するまで毎日放送を続けるという「水平」システムだ。視聴者にとっては嬉しいことだが、製作者は年間 25 本ではなく、170 ～ 200 本のドラマをつくらなくてはならず、さらに視聴率が落ちて終了してしまわないようにレベルを保たなくてはならないという、プレッシャーの毎日なのだ」[25] という。さらに、彼も指摘している通り、日本などでは新ドラマの放送は週に一話ずつだが、ロシアはたいてい月曜日から金曜日まで毎日一話、場合によっては二話ずつ放送することもある。なにしろ、シリーズの大量生産、大量消費が起こっている。とても全てを観きれるものではない。もちろん、作品のレベルはピンからキリまであるが、良作も多く、特に歴史ものは海外に売り込もうとする動きも盛んになってきている。エカテリーナ II 世の生涯を描いた『エカテリーナ (Екатерина)』(2014 年 アレクサンドル・バラノフ監督 全 10 話 440 分) は今後 30 ヶ国での放送が予定されているという [26]。韓国がドラマというソフトウェアを武器にして自国の文化を大いに広めたのと同じように、ロシアも今後シリーズの大量輸出国になっていくことが考えられる。

さらに前述のネステロフ氏も指摘しているが、最近のシリーズは外国のドラマのリメイクが驚くほど増えた。昨年放送されたウラジーミル・マシコフ主演『祖国 (Родина)』(2015 年パーヴェル・ルンギン監督 全 12 話 570 分) はすでに制作段階からアメリカの人気ドラマ『ホーム・ランド』のリメイクであることがマスコミに大きく取り上げられていたが [27]、元は外国ドラマだと知らずに観る場合の方が多いと思われる。トルコのドラマが原作のシリーズ [28] もあり、イスラエルのドラマが原作のもの [29] もあった。登場人物のメンタリティーにロシア人らしからぬ違和感がして、調べてみたら案の上、外国ドラマのリメイクだったとわかることもある。たとえば、『二重生活 (Двойная жизнь)』(2013 年ウクライナ作 ドミートリー・ラクチオノフ監督 全 10 話 505 分／ロシアでは 2015 年初放送) というたわいもないメロドラマを観たのだが、実の母と息子の関係が極端にぎくしゃくしていて、とてもロシア人の母息子の関係には思えなかっ

た。気になって調べてみると、やはり、ベルギーの人気映画のリメイクだった[30]。ロシアのシリーズを観ることで、わずかな間に、アメリカ、トルコ、イスラエル、ベルギーのドラマの世界を旅するようなものである。世界中のドラマをリメイクして観続けていたら、ロシア人のロシア的感覚もひょっとすると変化してくるかもしれない。ロシア人らしい母息子の関係については、ちょうど同じように母と息子を描いた、今度はいかにもロシア人らしい作品がある。今人気絶頂の女優エレーナ・リーャドワが少し前に主演した、『つつじの咲き始めるときに (Когда зацветёт багульник)』(2010 年ユーリヤ・クラースノワ監督 全 2 話 180 分) という作品で、うつ病の父が母に暴力を振るっているのを見かねて、小学生の息子が父を鈍器で殴り殺してしまう話だ。母はエリート医師であったが自ら息子の罪をかぶり、刑期を全うし、その後成長した息子と再会。どん底の生活から二人がそれぞれよき伴侶を見つけ、しっかり幸せをつかみ取るという物語である。が、なにより特徴的なのは、日本人なら引いてしまいそうなほど、息子と母親の愛情が強いところだ。かっこいい青年が自分の恋人に「ぼくと君とママと、三人で幸せに暮らそう」と言い放つとき、日本人なら一瞬絶句してしまうか、マザコンとして否定してしまうであろうほど、非常に強い母息子の絆が現れる。これこそロシアらしい母息子の絆ではないか。正真正銘のロシア国産のシリーズというわけである。

この『つつじの咲き始めるとき』は豪華な俳優陣の割に、かなり娯楽性の強い作品である。インターネット上の作品への評価も今一つだ[31]。ただ気になったのは、その後に鑑賞した映画『裁かれるは善人のみ (Левиафан)』(2014 年アンドレイ・ズビャーギンツェフ監督 141 分) との比較においてだった。『つつじの咲き始めるとき』でリャードワ演じる主人公が刑務所で服役しているとき、アンナ・ウコーロワ演じる受刑囚と女の友情を結ぶ。エレーナ・リャードワとアンナ・ウコーロワの組み合わせである。これは『裁かれるは善人のみ』と同じ組み合わせだ。しかも母、父、息子の微妙な関係で母親役を演じるリャードワという設定も同じ。リャードワとウコーロワが並んでいるシーンは、二作品ともその雰囲気が全く同じだったので、両作品を観た者ならば、『裁かれるは善人のみ』を鑑賞しているときに何度となく『つつじの咲き始めるとき』の場面がフラッシュバックしてくるであろう。一方は娯楽作品のシリーズで、他方は国際的映画賞の栄誉を受けた高尚な芸術映画である。差は歴然としていながらも、ついつい二つの作品を比べ、息子が実の息子かそうでないかで、結末の幸不幸が左右されるように思える。ズビャーギンツェフ監督はあのシリーズを観なかったのだろうか、それとも観て、あのひどく凡庸なメロドラマを高度な芸術映画に変容させたのだろうか、と問いかけたくなる作品である。

ウクライナ危機がロシア映画産業に落とす影

ロシアの映画産業はウクライナとかなり密接に結びついている。ウクライナで制作されるロシア語ドラマもかなりあった。ウクライナ危機が起こる前、РОССИЯ 1 では放送予定の長編シリーズ『コサック村の眠る間に (Пока станица спит)』(2014 年ロシア・ウクライナ合作 アレクサンドル・モホフ他監督　全 270 話 11772 分) の撮影のためにウクライナのキエフ近郊に、

20 世紀初めの設定にあわせた、ロケ用のコサック村と小さな町を二つ建設した。俳優陣はヒロインのゾリャーナ・マルチェンコをはじめとしてウクライナ国籍が半分、ロシア国籍が半分といったところだったが、それは当初全く何の問題もないように思われた。その準備の様子は 2013 年 10 月 30 日付のコムソモーリスカヤ・プラウダ紙に掲載されている [32]。ちょうどじわじわとウクライナ危機が起こるのと時を同じくして撮影・放送も進んでいったことになる。途中、2014 年 8 月アタマン役のウクライナ俳優がリハーサルで「ウクライナに栄光を!」と叫んだために、降板を促されたというニュースが伝えられ [33]、ヒヤリとすることもあったが、とにかくこの作品は無事全 270 話まで完結した。物語はこの上なく強引な筋書きだったが、毎回どきっとする瞬間に番組が終わって、明日の続きがついつい見たくなるという視聴者の心理をついた上手い作り方だった。ちなみにこのテレビ小説は放映後、これをモチーフに、ロシアのシリーズにしては珍しく二次商品としてインターネットゲームが作られた [34]。局のニュース『ヴェスチ (Вести)』の公式サイトでも一頃ユーザーが何万人を突破したと一々報道していた。それほど人気があったとは思えなかったが、本当はあったのかもしれない、それともせっかくだからロケのセットをもう一度使おうとしたのか、その後、続編の長編シリーズの撮影・放送が決定した。一方で、ウクライナがいくつかのロシアのシリーズを放送禁止にしたことが報じられていたときである [35]。だから、そのときは、ロシアのクリミア併合のあと、急速に悪化していくロシア・ウクライナ関係のなかでも、シリーズの合作が続けられるということは、ひょっとしたら、政治以外の分野ではまだ相互協力のできる関係なのだという、よいニュースのように思えた。『コサック村の眠る間に』の続編『最後のヤヌィチャール (Последний янычар)』(2015 年ロシア・ウクライナ合作 アレクサンドル・モホフ他監督) は当初全 250 話の予定で、2015 年 1 月 12 日に放送が始まった。脚本家が変わったせいか、前作の続編であるにもかかわらず、強引な設定の変更、登場人物の性格の豹変など、前作の余韻をずたずたに引き裂くような話に変貌していった。ひどすぎると思ったものの、なにしろ超長編なのでいついかなるどんでん返しがくるかもしれないと見続けていたが、あるとき中途半端な全 115 話であっさり打ち切りとなった。まがりなりにもテフィー賞のテレビ小説部門にノミネートされていたにもかかわらず、である（ただし、テフィー賞のテレビ小説部門については、もともとそのカテゴリーに入る条件の作品数が他の部門に比べて極端に少ないとつけ加えておくべきだろう）。打ち切りには人気の低迷や資金不足がネット上でささやかれており、もちろん、それも一因ではあろうが、ロシア・ウクライナの関係悪化も理由の一つに入ることは間違いないだろう。とりわけ、ウクライナがこのころ愛国的な（裏を返せばロシアにとってやや侮辱的な）コメディー映画 [36] を作り、そこにこの二つのテレビ小説に出演していたウクライナ俳優たちが出演したことも、マイナス要因と考えられる。

ロシア・ウクライナの関係悪化がその放映に影響していると考えられる名作がある。20 世紀前半の在外のロシア語歌手ピョートル・レーシェンコの生涯を描いた『ピョートル・レーシェンコ — 過去のすべて (Петр Лещенко.Все,что было.)』(2013 年ウラジーミル・コット監督 全 8 話 402 分) である。ウクライナ危機前の 2013 年にまずウクライナのテレビで放送された。

レーシェンコは、当時ロシア帝国領だった、現在ウクライナのオデッサ州にあるイサーエヴォ村に生まれ、モルドヴァの首都であるキシナウで育ったが、ロシア語歌手、ロシア人として在外で活躍した[37]。生涯、モスクワを見ることを夢見つつ、その願いは叶わずに終わる。レーシェンコの立場は、その出身地と民族アイデンティティの問題などと複雑にからまっている。ウクライナ生まれでロシア人のアイデンティティをもつ主人公である。いったんロシアとウクライナに亀裂が入ると、たかがシリーズとはいえ、懐かしいメロディの流れるメロドラマとするだけでは済まないことが考えられる。2015 年 8 月の段階では、 1 チャンネルでロシアでも今シーズンに初放映されると報じられていた[38]が、残念ながら 2016 年 2 月現在いまだに実現されていない。ロシアでの放映が待たれる作品である。

おわりに—ロシアのテレビシリーズの未来

このウクライナ危機に端を発する、国際社会からのロシアへの経済制裁、そして国家財政を揺るがす急激な原油安、それに連動したルーブル安のため、経済悪化の影響は徐々にロシア映画産業界に歩み寄ってきている。2015 年 9 月には、ウラジーミル公の伝記を扱う大作映画『洗礼者 (Креститель)』(ウラジーミル・ボルトコ監督) の撮影が財政的困難のため延期されるというニュース[39]や、人気アニメシリーズ『マーシャと熊 (Маша и Медведь)』が資金不足のため終了するというニュース[40]が続けざまに伝えられた。もっとも、『マーシャと熊』についてはしばらくの間はスピンオフ作品での制作は続けるという。資金をなんとか集めようとする制作サイドのいろいろな努力もうかがえる。前述の『シークレット・エージェントの手記』のオレグ・リャスコフ監督は次の作品『マダガスカルの王 (Король Мадагаскара)』(2015 年予定だった) を制作中と伝えられているが、その資金集めのためだろうか、前回の『シークレット・エージェントの手記』で使用した衣装や小道具をインターネットを通じて、有料レンタルすることを一時期行った[41]。また、ネットを通じて資金集めを呼びかけて制作をはじめた映画も出てきた。『不滅の回廊 (Коридор бессмертия)』(2017 年予定　フョードル・ポポフ監督) である[42]。資金を提供すると映画の最後のテロップに名前が載るほか、その金額によって、ネットの視聴や、映画のチケット、試写会のチケット、エキストラとしての出演、エピソードのある役、等々さまざまな見返りを提案している[43]。

たしかに、今また経済は後退し、シリーズをはじめとする映画産業全体は厳しい状況に置かれるだろう。しかし、なにより、ロシアは演劇大国であり、層の厚い供給者とシリーズを大いに愛する需要者が共存している。今後も間違いなく資金的な問題を解決して大作をどんどん排出することが期待される。今回ここに挙げた具体的な作品は、氷山の一角どころか、氷山を爪でひっかいたくらいの部分に過ぎない。ここ 20 年も経たない間に、ロシアを取り巻く環境もめまぐるしく変わり、とりわけこのシリーズの量的増加は劇的であった。そして、その作品一つ一つに独自の世界がある。もはや、シリーズは単なる娯楽であるに留まらない。シリーズの黄金時代はまだまだ続くであろう。芸術性の高い作品も低い作品も含めて、その大量の産物はロシアの大衆文化の看過できない要素になっている。

注

1. *Дуков Е. В.*, Варево развлечений//*Государственный институт искусствознания* (以下 *ГИИ* と表記), Развлечение и искусство, СПб., 2008. С.8.

2. *ГИИ*, http://sias.ru/research/ 以下、URL は特記以外 2018 年 1 月 27 日現在有効。

3. *ГИИ*, http://sias.ru/research/directions/

4. *ГИИ*, Развлечение и искусство, СПб., 2008,

5. *ГИИ*, Развлечение и искусство-2, СПб., 2011

6. 本論文中、ロシア映画作品の概要については主にロシア演劇映画総合サイト Кино-Театр.ру (http://www.kino-teatr.ru/)　およびインターネットテレビ Центрельное интернет ТВ の公式サイト (http://etvnet.com/) を利用した。

7. *Национальной Академией кинематографических искусств и наук России*, http://www.kinoacademy.ru/

8. 当該 DVD は日本では株式会社トランスフォーマー社から『提督の戦艦 (THE ADMIRAL)』として販売されているが、その冒頭にはトランスフォーマー社とともに 20th CENTURY FOX 社のテロップも映る。オリジナルはロシアの Dago Productions の制作であるから、日本にはアメリカを通しての流通であることがわかる。

9. *Экспедитор тайной концелярии*, http://zapiski-expeditora.ru/　さらに、オレグ・リャスコフ監督は自身の Facebook 上で、この作品がタイでも上映されていることを伝えている。https://www.facebook.com/oleg.ryaskov.71

10. *Центрально интернет ТВ*, указ.

11. この件は筆者が 1947 年生まれで当時サンクト・ペテルブルグ在住だった知人から聞き取った。

12. この作品についてはアレクセイ・ゲルマン監督も次のように高く評価している。：«Адъютант его превосходительства», «Семнадцать мгновений весны» — хорошие были вещи. Там были идеи, была режиссура, артисты. В сравнении с той же Лиозновой, в сравнении с актерскими работами Стржельчика, Павлова, Евстигнеева, Плятта — все, что нынче снимается в жанре сериала, есть чистой воды новодел. (*Герман А.*, Сеансу отвечают: Сериалы. Средний уровень: тогда и теперь // СЕАНС. №19-20. http://seance.ru/n/19-20/serials/serials-uroven/)

13. *Видео дня: Плавай как деды*, / Русская Фабула, 2015.07.25, https://rufabula.com/video/2015/07/25/swimming

14. *Городок*, http://gorodok.vikhrov.ru/anekdot.html

15. *ТЭФИ Индустриальная телевизионная премия*, http://tefitv.ru/

16. *Акунин Б.*, Сценарии, М., 2006.

17. その後テフィー賞は賞選考の再検討が行われ、現在のテフィー賞に最優秀脚本賞はない。

18. 後述する、『最後のヤヌィチャール (Последний янычар)』(2015 年ロシア・ウクライナ合作 アレクサンドル・モホフ他監督) である。ヤヌィチャールとはトルコの親衛隊兵士を意味する。

19. *РОССИЯ 1,* http://russia.tv/

20. *РОССИЯ 1, ВИДЕО/ ВСЕГО 47746,* http://russia.tv/video/index/menu_id/265/sort_by/1/

21. Истина где-то рядом. Мастер и Маргарита. Проклятые роли., Первый канал, 2013.08.29. 13:45

22. *Безруков В.*, Есенин, СПб., 2006. С.5-6　ちなみに本の最後にはこの嘆願書に対するロシア連邦検事総長からの回答も掲載されている。

23.『提督の艦隊』（前注 8 参照）

24. Центрельное интернет ТВ の年別アーカイヴ数によると 2009 年は 2008 年から半減している。

25. ワジム・ネステロフ「テレビドラマが足りない」『ロシア NOW』2012 年 12 月 24 日　http://jp.rbth.com/articles/2012/12/24/40611

26. Россия увеличивает экспорт российского кино и анимации,/ КИНОТЕ, 2014.10.17.

27. «Родина» VS Homeland: что не так с нашей версией./ Вокруг ТВ. 2015.03.17/ http://www.vokrug.tv/article/show/Rodina_VS_Homeland_chto_ne_tak_s_nashei_versiei_47139/

28. Узнай меня, если можешь, 2014. Украина. / РОССИЯ 1, http://russia.tv/brand/show/brand_id/58358/

29. Без свидителей, 2012. / Первый канал, http://www.1tv.ru/sprojects_in_detail/si=5870

30. *Марина Кузнецова*, «Двойная жизнь»как снимали бельгийские страсти на русский лад, / Tele.ru.28.08.2015, http://www.tele.ru/serial/shooting/dvoynaya-zhizn-kak-snimali-belgiyskie-strasti-na-russkiy-lad/

31. Кино-Театр.ru, http://www.kino-teatr.ru/kino/movie/ros/88142/annot/

32. *Ярослав Коробатов*, Для сериала «Пока станица спит» построили деревню и два города, Комсомольская правда, 2013.10.30 /http://www.kp.md/daily/26152.2/3040700/

33. Хостикоева «попросили» из российского сериала после его слов на съемках: «Слава Украине!», Зеркало недели, 2014.08.27. / http://zn.ua/CULTURE/hostikoeva-poprosili-iz-rossiyskogo-seriala-posle-ego-slov-na-semkah-slava-ukraine-151604_.html

34. はじめは «Ондноклассники», «ВКонтакте», «Мой Мир» といったソーシャルネットでのオンラインゲームだったが、次の記事で Google.Play からのダウンロードも可能になり、Android に対応するようになったことが伝えられている：«Пока станица спит» теперь на Android, Вести.ru.2015.07.21 /http://www.vesti.ru/doc.html?id=2643573

35. Госкино Украины запретило российские сериалы, Lenta.ru, 2014.10.22. /http://lenta.ru/news/2014/10/22/gk/ さらに、この後も断続的に、ウクライナが放送禁止リストにロシアの新たなシリーズを入れたというニュースが続いている。このことから逆に、シリーズが文化や思想の流入という点で注目されていることがわかる。

36. Последный москаль, 2015, Украина, реж. Семен Горов.

37. レーシェンコの生涯を描いたこのシリーズの脚本家がシリーズをもとに小説が書いている。*Эдуард Володарский*, Чубчик кучерявый, М. 2015

38. Новые русские сериалы: главные премьеры осени 2015, Вокруг ТВ, 2015.08.28 /http://vokrug.tv/article/show/Novye_russkie_serialy_glavnye_premery_oseni_2015_goda_49232/

39. Съемки фильма-биографии князя Владимира «Креститель» откладываются, Kinobussiness com, 2015.09.01. /http://www.kinobusiness.com/news/semki-filma-biografii-knyazya-vladimira-krestitel-otkladyvayutsya/

40. Популярный детский мультсериал “Маша и Медведь» закрывается из-за недостаточного финансирования, Вокруг ТВ, 2015.09.02, http://www.vokrug.tv/article/show/Populyarnyi_detskii_multserial_Masha_i_Medved_zakryvaetsya_iz-za_nedostatochnogo_finansirovaniya_49307/

41. この情報はインターネット上でその後まもなく削除されている。

42. Коридор бессмертия, https://www.facebook.com/koridorbessmertiya/?pnref=story

43. この作品は Boomstarter という企画による資金募集サイトを利用して、資金集めが行われた。https://boomstarter.ru/projects/388225/68784　また、資金集めの呼びかけは次のように書かれていた：

Друзья, приглашаем вас стать частью нашего проекта! Фильм «Коридор бессмертия» – это наша общая история и мы хотим, чтобы в создании картины могли принять участие все, кто неравнодушен к драматическим событиям эпохи Великой Отечественной войны.Поддержав проект, вы станете одним из его создателей и получите возможность увидеть свое имя в финальных титрах картины, побывать на съемочной площадке или исполнить одну из эпизодических ролей! (Коридор бессмертия, https://www.facebook.com/koridorbessmertiya/?pnref=story, 2015.11.03) その後、この企画は 2015 年 12 月 23 日に目標額を達成している。

Блестящий период телесериалов в России: развлечение, искусство и экранизация длинных романов

Аи Мория

В настоящее время все чаще наблюдается научный подход к развлечению и искусству в массовой культуре. В России каждый день показываются новые сериалы, их один за другим производят быстрым темпом. Новые произведения требуются постоянно. По своей культурной традиции русские любят драматическое искусство, а в литературе они охотно читают длинные произведения, в которых подробно и тщательно описываются детали. В связи с этим есть о чем задуматься в современной массовой культуре России. С другой стороны, данная ситуация пока не очень известна японским исследователям. В этой статье мы хотим представить несколько ключевых русских сериалов из разных периодов, разобраться и выяснить их развитие в разных социальных условиях и дать им характеристику по периодам. Исходя из этого, мы попытаемся изучить причины развития этого жанра и его перспективу на будущие годы.

В качестве главных примеров советского и постсоветского периодов возьмем два популярных сериала: «Семнадцать мгновений весны» и «Мастер и Маргарита». Оба они стали легендарными, следом за ними появляются развивающиеся от них проекты. Более того, в 2015 году их особо отметили показом в дни праздника День Победы, который широко отмечался по всей стране.

В период экономических сложностей 90-х годов в России часто показывали дешевые иностранные телероманы. Но одновременно с улучшением социальных условий после 2000 года начали выходить в эфир отечественные сериалы хорошего качества, например, экранизация детективов Б. Акунина. При этом хотелось бы обратить внимание на то, что в это время вышло много экранизаций шедевров литературной классики, включая «Мастера и Маргариту» и ряд романов Достоевского. После краткого упадка из-за влияния мирового финансового кризиса 2008 года русская киноиндустрия восстановилась. Теперь часто производят и показывают русские варианты иностранных сериалов. Это означает, что сейчас ощущается нужда в свежих материалах для новых произведений. Расцвету русских сериалов могут помешать международные санкции и ухудшение отношений с Украиной. Но мы уверены, что и в будущем нас ждет еще много выдающихся шедевров.